
悪役たちの宴

海中銀河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪役たちの宴

【Nコード】

N9164S

【作者名】

海中銀河

【あらすじ】

スーパー戦隊の話なのにスーパー戦隊が出てきません。一応スーパー戦隊に出てきた悪役たちを短編小説として書いていけたらいいかなと思っています。たぶんヒーローの出ない悪役ばっかの話なんて誰も興味がないと思いますが、まあ頑張ります。キャラが崩壊している可能性もあります。後、昔の悪役はわかりません。中途半端ですいません。

作者は文章力が皆無です。その癖幼稚な発想はコロコロ出てきます。よろしく願います。

黄金龍の戯（前書き）

このようなところに足を運んでくださる稀代な方がおいでとは。ようこそいらっしやました。あらずじにも書きましたが、ここは主に悪役を取り扱おうと思っっているのでスーパー戦隊は出てきません。ヒーローの活躍が見たいという方は申し訳ございませんが、バックをお願いします。

作者自身、文才がまったくとっていい程ない、ただの物好きです。大層なものはおいておりません。皆様が求めている様なものもたぶん、ないと思います。ていうか気持ち悪いです。それでも見てやるよという優しい方は是非見てやってください。ではどうぞ。

黄金龍の戯

退屈だ。

暖かい風が頬を優しく撫でる。あたりを見渡せば色とりどりの花が一面に咲き誇り、
眼を凝らせば小さな命が陽の光の中で目覚めようとしていた。

くだらない。

陽の光が頭上で輝きその暑さと眩しさで思わず木陰に隠れる。
耳を澄ませば聞こえる新緑のざわめき、穏やかなさざ波の音が。

どうでもいい。

朱色黄色の様々な枯れ葉が散乱している。
静かで騒々しい。生命が眠りの準備をしているのだろう。
ふと下を見ればそこには鮮やかなオレンジに染まった果実が一つ。
手に取り口にすれば甘味が口内に広がった。

またか。

あたり一面に雪で覆われた白銀の世界。生命の躍動は感じられない。
雪に触れてみる。ヒヤリと冷たく、触れている部分の熱を奪い取っていく。
手をはなし白い吐息を自分の手に吹きかける。暖かい。
この凍てつく世界で動いているのは自分だけだろう。

太陽は昇りそして沈んでいく。そして季節は巡る。
くるくるクルクル繰る繰ると。同じことの繰り返し。

ああ、退屈だ。

呟く声に誰も答ええない。闇の中で自分の声だけが空しく響いた。

あまりにも暇だった。退屈すぎて干からびて死んでしまいそうだった。

だから暇つぶしに人里におりていった。
町は賑やかだった。音楽は絶えず鳴り響き、人々は舞い踊る。町全体で何かを祝福しているかのように
町の人々の顔が幸福に満ちていた。

「あの、何かあったのですか？」

彼は近くにいた黒い短髪の男性を捕まえて尋ねた。

「あんた知らないのかい？今日は皇子様の結婚式なんだよ」

「結婚式・・・ですか？」

「ああそつだよ。隣の国のお姫様とな。だから今日は皆がお祭り騒ぎつてもんよ」

「・・・なぜ、結婚を？」

「噂によれば友好同盟を結ぶ証として親睦を深めるために結婚するとか言つてたが、まあ、どっちにしるめでたいことだ」

男はウンウンと頷きまるで自分の事のように幸せそつだった。

「ところであんた旅人かい？」

「ええ、まあ・・・」

「だろつと思つたよ。珍しい髪の色をしてるもんな」

男性はニカツと愛想よく笑い、小麦色をした金の髪を指した。

その時、誰かを呼ぶ声が聞こえた。男は声の方を振り向き、ちよつとまつてると手を振る。どうやら男の仲間らしい。

「今日この国にきて良かったな。当分はこの調子だから、ま、楽しんで行つてくれや。えつと・・・」

「・・・ロンと申します」

「じゃあなロン。ゆつくりしていけよ」

男はそう言つなり仲間のもとへ走り去つていった。

人々は幸福に笑い、鳥は祝福を謳い、穏やかなる風は平穩を運び、新緑の木々は祈りにざわめいていた。

町中の生命が幸せに満ち溢れ、歡喜していた。

そんな光景を無表情にロンは見つめていた。心の奥底で沸々と得体のしれないものが湧き上がってくる不快感を抱きながら。

今すぐにこの町を、人を、景色を、目に見える全てのものを、耳に纏わりつく音という音を滅茶苦茶にしたいという破壊衝動を抑えながら。

その時彼の頭に何かが閃いた。まるで神の啓示の様に。

ああ、そうだ。全てを滅茶苦茶にしてやるう。

呟いたその言葉は冷たく、暗い狂気を孕んだ瞳で彼は笑った。

黒煙が空を覆い尽くし、何かが焦げたような悪臭が鼻孔を刺激する。荒れ果てた大地に数か月前の幸せに溢れた町の面影はどこにもなかった。

崩れた建物にはまだ火が燻り、至る所に屍が転がっている。その屍たちは目覆いたくなるような凄惨なものだった。

完全な五体そろっている死体などなく、どこか欠損している死体がほとんどだ。

斬られた箇所から臓腑がはみ出ているもの、頭が碎け脳漿が衣服にこびりついたもの、中には串刺しにされた幼子の亡骸も目に付いた。まさに地獄絵図とはこのことだろう。

ロンはこの光景を見て愉悦に浸っていた。

人間とはなんて愚かなんだろう。

ロンは口に手を当て笑いを噛み殺した。

なんと滑稽なんだろうか。しかしまさかこんなにも早く芽を出すとは思わなかった。もう少しかかると思ったのだが。

ロンは数か月前のことを思い出す。

あの日の夜、彼は皇子のいる部屋を訪ね、ある警告し去って行った。

『気をつけなさい。貴方の大切な愛しいお姫様は隣国のスパイですよ。貴方どころか国全体が災いが降りかかるでしょう』

その言葉を聞いた皇子は一笑したが、その日から身の回りで次々と事故や事件が起き始めた。その中には命に係わることが何度もあった。

そういつた事故や事件には決まってお姫様が常いる時だったのだ。皇子は次第に姫を疑い始めた。

そんな時、国王が殺害されたという知らせが入った。死因は毒殺。皇子は心を病んでしまった。姫はもちろん家臣さえ寄せ付けず、彼は一人途方に暮れていた。

『お困りのようですね』

皇子の目の前に、あの時自分に警告を発してくれた青年が佇んでいた。皇子にはその青年が神が使わせた救いの使者にみえていたのだろうか、皇子は青年に全てを打ち明けた。青年は親身になっていた。そして一つの答えを導き出したのだ。

『ならば、姫を殺しなさい』

皇子はその言葉に多少ためらったが、青年は一気に畳み掛けた。

『何をためらっているのです？先に殺したのはどこの誰ですか？殺られたら殺り返す。さもなければ次はあなたかもしれませんよ？』

そして皇子の耳元でソツと囁く。

『憎いでしょう。愛する父君を殺した相手が』

その言葉に皇子は目を見開いた。その目にはどす黒い炎を宿していた。

皇子は青年に礼を言つと部屋から出て行こうとしたが立ち止まり青年の方を振り向いた。

「名を聞いてもよいか」

『ロンと申します。』

「龍ロウか。ありがとうございます」

そして皇子は出て行った。

『ご武運を祈りますよ。皇子』

青年、ロンはこの先の未来に薄く笑いながら皇子を見送った。

その後姫は無残に殺されたという。そして隣国との戦争が始まり、

この有様だ。

疑心という種を蒔いて大切に育てればあっという間にこの通り。育てた甲斐があった。

ロンはこの時初めて悦びを感じていた。そして同時に何か満たされていた。今までどんなものにも興味を示すことがなかったのに。自分の虚言でこつも儂く散っていくものなのか人間とは。幸福とは。

なんとという悲劇だろう。なんとという喜劇だろう。

彼は可笑しくて笑った。唯笑って。嗤って。晒っていた。

これが”幸福”か。

満たされた彼の中で暗い快感が芽生えた。

ああ、人間よありがとう。

彼は心の底から人間に感謝した。この世に存在してくれてありがとう。

今自分は最高の玩具おもちゃを手にしたのだ。

もう暇を持て余さなくてもいいのだ。彼の中で初めて世界が色づき始めた。

さあ、次は誰と遊ぼうか。

黄金龍の戯（後書き）

この度はこの小説を見ていただき誠にありがとうございました。

もしかしたらこれ見て気分を害される方がいるんじゃないかとビクビクしている作者です。まあ、読んでくださる方がいればの話ですが（笑）

こんな具合で小説を執筆していたらいいなと思います。
では最後にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9164s/>

悪役たちの宴

2011年10月9日01時02分発行